

中学校運動部活動指導に関する外部指導者の 信念・指導内容・関係性の研究[†]

ーその2 外部指導者に対するインタビュー調査からー

長澤 岳大*

秋田大学大学院教育学研究科

松本 奈緒**

秋田大学教育文化学部

運動部活動はスポーツを通じて生徒の総合的な成長を支える活動である。この指導に関しては伝統的に学校の教員が担ってきたが、教員の多忙化の原因にもなり、これを軽減するために文部科学省は外部指導員の導入を決定した。このように重要性を指摘され、今後着目される外部指導者について研究する意義があるだろう。本研究の目的は中学校運動部の外部指導者の信念や教育的意義、教育内容、顧問や学校、保護者との関係について事例研究として明らかにすることであった。研究の結果、外部指導者は指導信念として、強くなるだけでなく、スポーツを通じて感動を体験させる、スポーツを通じた人間関係や出会いの素晴らしさを知る等、人格形成や人間関係の構築も含めた幅広い考えを持っていることが明らかとなった。指導内容や指導方針として、基本的な技術の習得や自分で考えることを含めた練習、動きながら教えること等の考えを持っていることが明らかとなった。関係性については、顧問とはある程度主導権を持ちながらも上手く分担し、保護者とはコミュニケーションを取るように気を配っていることが明らかとなった。しかし、中学校における部活動の意義については理解しておらず、また、学校に対し部活動の活動時間の制約が多いことを不満に思い、改善してほしいという、運営・管理上の事情を踏まえない過度な要望を持っていることが明らかとなった。

キーワード：運動部活動、外部指導者、信念、インタビュー、中学校

1. 諸言

運動部活動は「学校において学年や学級の枠を超えてグループをつくり、共通の趣味・教養を楽しむ授業外の活動」(木村, 2015)である部活動の中で、運動をその活動の対象として行われる活動である。日本の運動部活動はスポーツの普及や増進に

一役買ってきたが(神谷, 2014; 鈴木, 2015; 友添, 2016)、特に中学校で65%の生徒がその活動に参加しており(運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議, 2013)、その参加率は高校よりも高い。平成20年度に公示された中学校学習指導要領では、部活動に関して「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり」(文部科学省, 2008, p19)と記述されている。したがって、学校で行われる運動部活動は生徒の総合的な成長を支える一翼を担っているといえよう。

運動部活動の指導については、伝統的に学校の教

2017年1月10日受理

[†]Third party junior high school sports coach's belief, teaching contents, thinking relationship with school and parents: interview analysis

*Takehiro NAGASAWA, Graduate School of Education, Akita University

**Naho MATSUMOTO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

員が担ってきた。運動部活動の指導は学校教育課程の一部であり、したがって学校を運営する教員が担うのが当然であるという暗黙の了解の元、実施され、先生が授業以外でも生徒に深く関わり生徒に多様な経験を与える貴重な機会として扱われてきた(神谷, 2014; 鈴木, 2015; 友添, 2016)。しかし、近年、OECDによって平成26年に公表された国際教員指導環境調査(TALIS)では、日本の「教員の勤務時間は他の調査参加国よりも特に長く、また人材の不足感も大きい」(文部科学省, 2014)ことが示唆され、「日本の教員の1週間当たりの勤務時間は参加国最長(日本53.9時間、参加国平均38.3時間)このうち授業時間は参加国平均と同程度である一方、課外活動(スポーツ・文化活動)の指導時間が特に長い(日本7.7時間、参加国平均2.1時間)」(文部科学省, 2014)ということなどが明らかになった。また、8都県の公立中学校を対象とした調査(中澤, 2008)においても部活動(運動部)の課題として部活動の時間や量が負担になっていることが報告されている。また、平成26年7月に日本体育協会の調査によると、運動部活動の指導者について、担当教科保健体育以外であり、担当している部活動の競技経験もない教員が中学校で45.9%であるとされている(日本体育協会, 2014; 中央教育審議会, 2015)。したがって、教員のみが運動部活動の顧問・指導を行うという前提であると、運動について十分な知識や経験のない者が運動部活動の指導を行わなくてはならないという限界もある。これらの限界を踏まえ、文部科学省は2010年、運動部活動の充実を図るために、学校を多様なスタッフで支えていく「チーム学校」の一員として外部指導者の導入を決定した(文部科学省, 2010; 2015)。これに伴い、教員に加え、部活動の指導、顧問、単独での引率等を行うことができる新たな職(部活動指導員(仮称))を設け部活動を教員以外の人間が部活動を指導できる制度を提案、整備しつつある(中央教育審議会, 2015; 高木, 2016; 友添, 2016)。これまでも外部指導員(外部コーチ)は学校現場に存在したが、あくまで学校の中では補佐的な役職であり、単独での試合等の引率ができないという限界があった。この制度が導入されることによって、外部指導員が単独で試合等の引率が行え、顧問である教員は休養をとることができるが見込まれている。また、部活動で行うスポーツの経験者が外部指導者として指導を行うこと

で、より専門的な指導を生徒が享受できる機会が増えるという面でも改善が見込まれる。以上の理由から、今後運動部活動でより重要な役割を担い、また、注目を浴びている外部指導員の実態を明らかにすることは重要な意義があるといえよう。

では、運動部活動の外部指導員について先行研究では何が明らかになっているであろうか。足立(2015)は中学校運動部活動における外部指導員の参与状況を質問調査紙法により明らかにした。この報告によると、指導を外部指導者単独で担当しているのが31.9%、複数担当は61.0%であり、指導日に関しては指導の実施6割以上が土曜日は59.6%、日曜日は45.5%であるのに対し、平日放課後の活動の指導が5割以下であるのが61.7%であった。このことから、外部指導員は主に複数担当で週末を中心に指導している現状が明らかとなった。また、青柳(2015)は外部指導員が運動部活動に関与する促進要因・阻害要因についてインタビュー調査により明らかにしたが、外部指導者は促進要因としてポジティブな感情や外部指導者の成長、サポート、人脈形成を挙げており、阻害要因としてけが人が出ることへの不安、非協力的な顧問、保護者との人間関係の悪化、施設や設備の不備、時間的負担、プレッシャーや期待、礼金の不足、不明確な立場や役割が明らかになった。また、外部指導員の導入・維持について阻害する要因について、教員は人間関係の悪化、指導方針の不一致、外部指導者との調整の難しさ、謝礼金の不足、教育面の軽視を挙げ、組織的な取組を行った地方自治体は人材を探す難しさ、補助が切られた後の継続性を挙げた。以上のように外部指導者の指導の頻度や協力体制、その促進要因及び阻害要因が明らかにされ、一定の研究の成果が明らかになっている。しかし、外部指導員自身の部活動指導に関する信念や教育的意義、顧問や学校、保護者との関係をどのように考えるのか、その詳細については明らかになっていない。また、特定の外部指導者に絞りを絞り、その状況やスポーツ、指導経験を照らし合わせながら事例研究として報告してものは存在せず、こういった視点でも研究を進めていく必要性が指摘できるであろう。そこで本研究の目的は中学校運動部の外部指導者の信念や教育的意義、教育内容、顧問や学校、保護者との関係について事例研究として明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2-1. インタビュー調査について

インタビュー調査は、解釈学的アプローチであり、主に心理学や社会学分野において用いられてきた方法であり、近年教育学分野や体育学分野でも用いられるようになった。この方法は実証的アプローチで説明できない対象について理解するための方法論として発展し、対象者の主観的な意志や意味づけを重視し解釈を加えながらまとめていく方法である。その種別は対象者の人数規模に関しては個人、集団インタビュー、質問項目の事前の固定度に関しては構造化インタビュー、半構造化インタビュー、非構造化インタビューがある。その分析方法に関しては質的研究の手法を用い、その内容の種類を選別しカテゴリー化を行い、その内容からラベル付けを行い、インタビュー内容から導き出される現象を明らかにする。インタビューを研究手法として用いた先行研究としては、以下のものがある。例えば、吉田（2012, 2014）は、元プロスポーツ選手だった人物が障害者となり障害者スポーツ選手としてキャリア移行した事例研究を行った。この研究で吉田は、対象者にこれまでの人生を振り返りながら回答するライフヒストリー研究の手法を用い、一定の結果を明らかにした。また、中澤（2011）はフィールドワークの一部として、参与観察の後にインタビュー調査を行い、教師の運動部活動での指導上の困難に対する意味づけについての研究を行った。青柳（2015）は運動部活動の外部指導員の外部指導者、教員、促進的な取り組みを行った地方自治体にインタビューを行い、外部指導員が運動部活動に関与する促進要因・阻害要因について明らかにした。

2-2. 研究対象者

本研究の対象者は、秋田県内の公立中学校において外部指導者を行うAさんである。対象者の属性は、40代男性で卓球部において外部コーチとして部活動に関わっている。Aさんは職業は自営業であり、競技歴として全日本選手権3回出場経験がある。対象者の選定として、事前の質問調査紙調査において、事後のインタビューに協力可能と回答した人の中からプロフィールや記述内容が興味深い研究者が判断した人を選定し、インタビューを実施した。Aさんは競技歴として全国大会出場の経験があり、また、県の外部指導員サポート事業の利用経験もあっ

た為、選定された。

2-3. データの取得方法及び分析方法

本研究は個人を対象に半構造化インタビューを行い、事前の質問紙調査や研究者の問題意識からインタビュー前におおまかに質問内容を考えておき、インタビューを行う中により質問したい事項が出てきた場合には新しい質問を行ったり、より深く質問をしたい所には時間をかけるなど、流動的に質問を付け加える方法で行った。インタビュー場所は、対象者の勤務先で76分間かけて1回のインタビューを行った。なお、インタビューは誘導とならないよう留意しながらより深く質問内容にアプローチをするように心がけた。

データの分析方法としては、インタビューの逐語記録を文章におこした後、それぞれのインタビュー内容に下線を引き、内容にあわせてラベル付けを行い同じ内容のものを集めてカテゴリー化を行った。その後、そのラベルを近いもの同士で配置しながら、概念図を作成した。なお、研究の正当性、妥当性を担保するための研究の手続きとして、研究者のトライアングレーションとデータのトライアングレーションとを行った。研究者のトライアングレーションとして、以下の手続きで作業を行った。本作業は保健体育を専門とする大学院生である主研究者が1名で行い、そのラベル付けの内容や出来上がった概念図について大学に勤務し保健体育（体育科教育）を専門とする研究者である共同研究者が整合性を確かめ論議の元修正を加えた。データのトライアングレーションとして、事前の質問調査紙の回答とインタビューのデータを用いた。

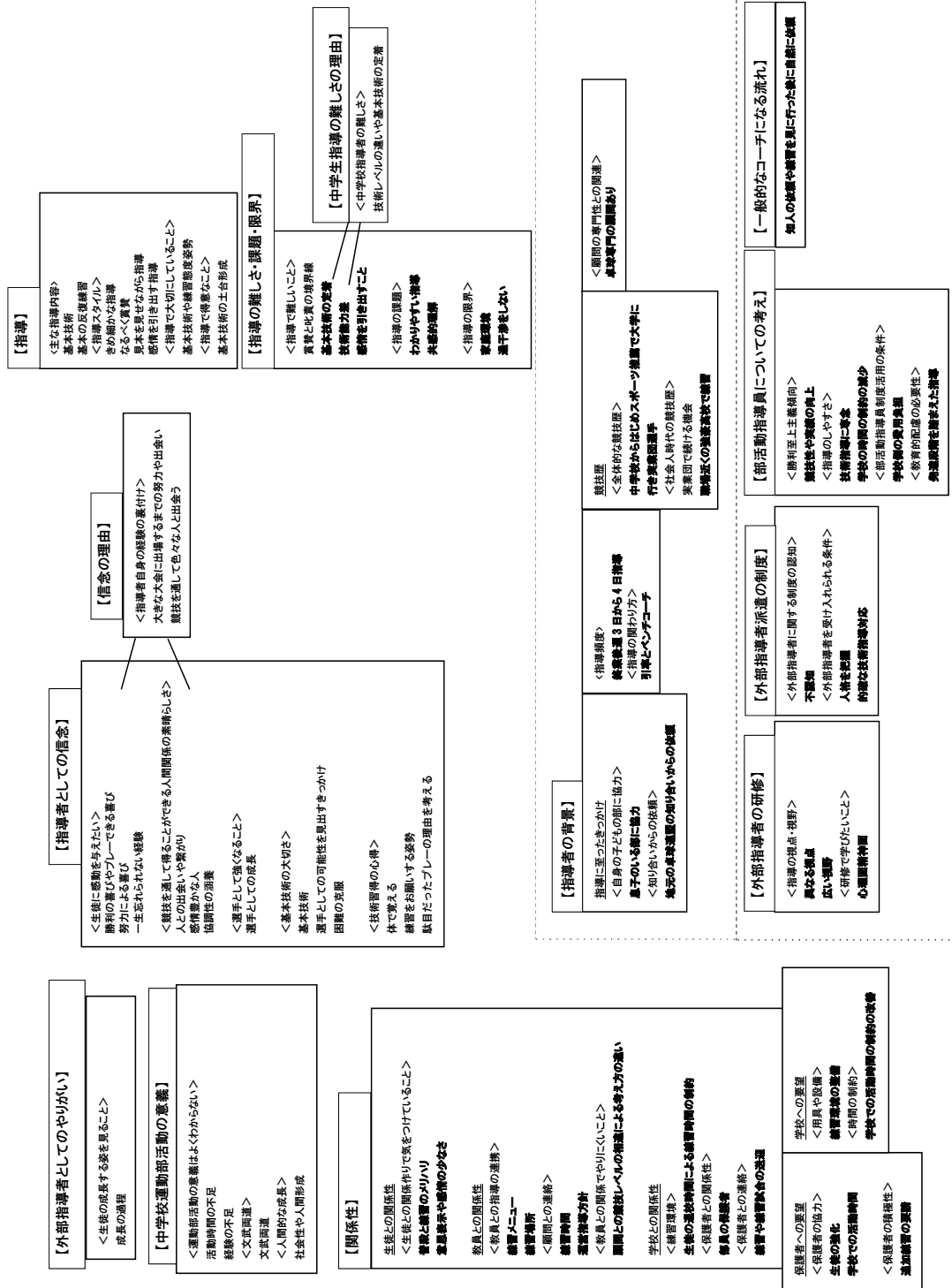
3. 結果及び考察

インタビューの結果、インタビューによって得られたカテゴリーが図1の様に明らかとなった（図1参照）。

3-1. 指導者の背景

指導者の背景として、競技歴についてはAさんは中学校からはじめスポーツ推薦で大学（法学部）に行き実業団選手になった。Aさんは始めは社会人になったら競技から遠ざかろうと考えていたが、入社した会社の方針から、社会人になってからも競技を続けられるようになった（II）。

図 1 Aさんインタビュー概念図



I1 「実業団に入社してもちょっとまず故障もけっこう多かったので、たぶん3年でどうせ首になるだろうという考えがあって、これではまず、ちゃんと普通に仕事しよってという考え方で会社入って、そこで卓球を断念せざるをえないかなと思ったんですね俺的に。まあこれでもいいかなと。と思った矢先に行った会社がそのまあ、そうですね、会社のトップの人に近い人が、卓球に携わっている人がいて、で、俺が入ってきたことをまあ、聞きつけて、まあ自動車（商社？）の販売会社ですから、やっぱり試合なんて出れるもんじゃないと思ってたんで、私としてはね、もう続けることはできないだろうって。まあでもその人が会社で獲れって言われて、私を試合に出してやってくれっていうことで」

そして、その練習環境として、近くの強豪校で練習を行うことになり、コーチを行いながら実業団選手として練習を行う（I2）。これがAさんのコーチ歴のはじまりとなった。

I2 「続ける環境が、たまたまその会社のすぐ側に〇〇商業高校ってまあ、そこで私の知っている人が監督、総監督も私をよく高校のときに遠征行くと一緒に行ってた、すごくよく知ってる人だったので、でその、それで練習行くようになって、そのままそこで、まあ俺も練習してコーチやるっていう感じでそこから秋田商業での道のりが始まったんですね。コーチ歴として。」

現在の中学校の指導に至ったきっかけとして指導者自身の子供の部に協力しようと思ったこと、地元の卓球連盟の知り合いからの依頼で部活動に指導者として関わることになった。指導頻度はAさんは自営業であるため、休業後週3日から4日学校の部活動開始の時間に合わせて出向き指導を行っている。顧問は2名おり1名は卓球専門の教員であり、もう1名は他の競技の経験者が就任しているが、Aさんは主に男子生徒の指導を行い、主に練習メニューを主導で決めながら練習を見、引率とベンチコーチとして関わっている。

3-2. 指導者としてのやりがい・信念

Aさんは、現在の中学校での指導のやりがいとして生徒が何かできるようになった軌跡（成長の過程）を見たいと成長の過程を挙げている。

指導者としての信念として、生徒に感動を与えたい、競技を通して得ることができる人間関係の素晴らしさ、選手として強くなること、基本技術の大切さ、技術習得の心得が抽出できた。

生徒に感動を与えたいに関しては、まず、勝った時の嬉しさや喜びと言ったお金や物にはない感動を与えたい（I3）、大観衆が注目する試合でプレーできる喜びを経験できるきっかけを与えたいといった、勝利の喜びやプレーできる喜びが明らかとなった。

I3 「やっぱり、感動を与えてあげたい。これはあります。勝ったときのとてつもない嬉しさとか、やっぱり、できなかったものがこういう風にできるようになって、どーんってここに行ったときの喜びっていうのは、やっぱりお金とかね、物とかには無い素晴らしいものがありますよ。」

次に努力が実を結んだ時の喜びを経験させたいといった努力による喜び、3番目に、生涯忘れられない感動をする経験をしてほしい（I4）、大きな大会の注目試合をしたというような一生の宝になる経験をしてほしいといった一生忘れられない経験が明らかとなった。

I4 「今まで一生長く一個だけ思ってるのはまあ、〇〇県代表で行った試合でまあ、東京選手権って言うまあ、これ社会人も出てる試合なんすけど、それでまあ、出て、まあ、トップシードの第一シードのまあ、選手って3回戦からですよ、4回戦とかそこまで行って、その人当時日本のナンバーワンのオリンピックの代表の選手そういう人とやれたこと、それも一生の思い出です。NHKにも卓球の講習で出てるMさんっていう人とやれたこと、これはもうやっぱり一生の宝ですね。二度と一生忘れられない。それによってほらやっぱり一生こんな人と絶対本番できるわけないと思ってる人とやれたなんてのは、やっぱり、

何事にも替えられない経験じゃないですか。」

競技を通して得ることができる人間関係の素晴らしさとしては、卓球を通して人間関係の大切さや素晴らしさをわかってほしい、卓球を通して得た人間関係の素晴らしさや人とのつながりを大切に指導したい (I5)、卓球を通して人との触れ合いや出会いと言った素晴らしいものを学んでほしいが明らかとなった。さらに、人との出会いを大切に感情豊かな人になってほしい、協調性を大切に指導したいという協調性の涵養等の人間形成の視点も明らかとなった。

I5 「こういう人間関係の素晴らしさ、人との繋がりがあってというのは正直やっていなかったらどうなっていたか、やっぱり何にも無いわけですよ。私そういう人たちとの繋がりも無くなっていたし、やっぱりそういう一生懸命そういう風にやるからこそその人とも語り合えることってあるじゃないですか。俺はやっぱりそういう部分は大事にして指導にも生かして本人たちも関わることによってそうやってほしいっていうのは俺の中にはあります。」

こういったAさんの信念の理由として、指導者自身の経験の裏付けがあった。Aさんの語りの中で代表として全国大会に出場するためには何十人も人が出られない上での代表であって、したがって自分位負荷をかけて高い気持ちのレベルで練習し生活面でも摂生していくという責任感が生まれる。勝っただけで終わりではなくそういった負けた人の気持ちも汲んでいく選手になるべきだという考えがある。また、卓球の選手としての活動を通して得た人間関係から、人との出会いを大切にしたり感動できる選手になってほしいという考えにいたったようだ。

選手として強くなることについては、Aさんは選手として強くなることはもちろんであるが、基本技術の大切さ、技術習得の心得についても強調している。基本技術の大切さとしてはまず、基本技術の徹底積極性考えること、基本技術の土台がないと色々な対応ができないため基本技術の練習をやらせている、ある程度の基本ができた技術レベルまで成長させたいといった基本技術を挙げている。次に基本練習をしっかりとすることによって選手として活躍する

きっかけを与えたい、競技を始めたときから基礎基本をしっかりと教われれば良い方向に選手として成長する、早期から基本技術といった土台をつくってあげることによって色々なチャンスが出てくるといった、選手としての可能性を見出すきっかけが挙げられた。そして3点目として基本技術がしっかりしている子は困難を乗り越えられる (I6) といった、困難の克服が挙げられた。

I6 「やっぱり基本技術がきちっとした子っていうのはやっぱりまあ、やっているうちには壁って必ず出てくるんですよ。たぶんどんなスポーツでもそうだと思うんですけど。でも乗り越えると思います。」

技術取得の心得については、まず、スポーツは集中的に練習して覚えることが必要 (I7)、何も考えていなくても体が動く状態にならないと人の真の強さや技術の引き出しは出ないといった、体で覚えるが挙げられた。

I7 「ある程度そういう集中的にがーっとやっぱりやらないと、まあ、何のスポーツでもそうですけど、体で覚え込むものじゃないですか」

次に強い弱い関係なく自分から練習をお願いする姿勢 (I8) といった練習をお願いする姿勢、3番目に駄目だったプレーの理由を考える (I9) といった駄目だったプレーの理由を考えるが挙げられた。

I8 「自分が弱くても積極性っていうのはどういうことかと、その人が練習に来ているのであれば、強い弱い関係なくもう『お願いします』とやっぱ、自分から進んでやっぱりお願いしに行くっていうそういう姿勢ですかね。試合でも。まあ、それがやっぱり無いとある人と無い人でやっぱり最終的にどんどん変わっていくんで、そこはやっぱり『どんどん行け』っていう風には話はしてますね。」

I9 「1球ミスしたら練習中でも考えなさいって、『何で今だめだったのか』って理由を必ず一瞬でいいから考える。でないと同じことの繰り返しなっちゃうでしょ。ただやってるだ

けだって、まあ、『ちょっとこの足の動きが足りないから角に当たってしまった』『もうちょっと足動けば芯に当たるかもしれないの』ってあとはまあ、『もうちょっと体の前で捉えればそんなに振らなくても行くのに』とか、まあ色々原因があるんです。ミスするのは、私自身もそうだし。だからそこはやっぱり、うん、それを考えてやるのとやらないのではまったくこれ変わる、変わった選手なっちゃうので、それはちょっと言ってます。」

3-3. 指導

指導に関して、主な指導内容、指導スタイル、指導で大切にしていること、指導で得意なことが明らかとなった。主な指導内容としては、主にフットワーク打球点体の使い方体のバランスといった基本技術、中学生の発達段階を考慮した基本の反復練習といった基本の反復練習が挙げられた。指導スタイルとしては、手取り足取り教える指導といったきめ細やかな指導、練習中良くできたときはほめるようにしているといったなるべく称賛、練習中は声掛けよりも生徒と一緒に動いてジェスチャーで指導している、プレイングコーチとして自身も動きながら手本を見せて指導している (I10, I11) といった見本を見せながらの指導を心掛けている。

I10 「一緒にやっているときのどっちかというところはプレイングコーチなので」

I11 「球回しながらやってるプレイングコーチなんですよ。あの一、人によって自分はやらないっていうコーチもいるんですね。私は今のところとっているスタイルはプレイングコーチ、だからまあ、ある意味野球でいけばノックしてる人みたいなもんですよね。そういう感じです。だから、やっぱり正面からやるとこなので、やっぱり『体の動きこうした方がいいよ』とか、良くできたときは『ああその感じだ。忘れるなよ』って『ずっとその感じでやれよ』って、まあ、だめなときはやっぱりそう、だめなところ教えてやったり、まあ、そういう感じですかね。」

また、指導スタイルとしてへとへとになるまでプレーさせることで感情や本当の本心が出てくる (I12)、ひたすら練習させることで感情を引き出すことができる (I13) といった感情を引き出す指導を心掛けていると語っている。

I12 「プレーさせてへとへとなるまでやらせてみないとわからないですこれは。そうすると本当の本心が出てくるのがあって」

I13 「このままじゃいけないとか、ああもうだめだとか、まあ、あきらめが早いとか、いや、なかなか執着心がある奴だとかっていうのが、これはやっぱり死ぬほどやらせてみるしかないかなって思ってますけども」

指導で大切にしていることとしては、基本技術の徹底と生徒の積極的態度と生徒が自分で考える事 (I14) といった基本技術や練習態度姿勢が挙げられた。また、指導で得意なこととしては、基本技術といった土台ができている生徒を教えるのは得意といった、基本技術の土台形成が挙げられた。

I14 「技術面においていけば、やっぱり基本的技術の徹底さかな、まずそこ1つ。あとはやっぱり、積極性、あとは考えること、ミスしたときの、この3つかなと思います。」

3-4. 指導の難しさ・課題・限界

指導の難しさとしては、まず、ほめることと叱ることの境界線が難しいといった賞賛と叱責の境界線が挙げられた。次に中学校は基本技術の定着が難しい (I15)、ある程度の基本ができたレベルまで成長させることが難しいといった基本技術の定着、経験者と初心者の技術レベルの違いが指導を難しくしている、できない子への指導が難しい基本技術といった土台ができていない生徒を教えるのは指導の壁になっているといった技術能力差が挙げられた。さらに、感情を引き出すことは難しく、きつい練習で引き出したいといった感情を引き出すことが挙げられた。これに関連し、中学指導の難しさとして、技術レベルの違いや基本技術の定着が挙げられた。

I15 「それがやっぱり中学校の1番難しいところ

です。どうやってある程度のみ、この辺まで来ればあとはどんどんどん応用させれば良くなっていくっていうラインまで持っていくのがそれは難しいですやっぱり。」

指導の課題としてできない子に理論を分かりやすく教えることといった分かりやすい指導、相手の考えていることを理解することといった共感的理解が挙げられた。また、指導の限界として、生徒の家庭環境に関すること等複雑なところはコーチとしてあまり触れるべきではない (I16)、家庭環境はどうにも指導できないといった家庭環境、生徒から求めない限り自分からは深くかかわらないようにしているといった過干渉をしないが挙げられた。

I16 「家庭環境とかそういったところはまあ、黙って目を瞑るしかないだろうし、あと、そうだなー関わるべきではないことか、まあ、家庭環境はそうだね、あんまりこっちからも複雑なそういうほら、そういうところはコーチとしてはあんまり触るべきではない。」

3-5. 中学校運動部活動の意義

中学校運動部活動の意義については、運動部活動の意義はよくわからない、文武両道が挙げられた。運動部活動の意義はよくわからないについては、活動時間の不足 (I17)、経験不足 (I18) から整理できた。

I17 「(中学校運動部活動の意義について)うーん、これは私もすごく悩んでいます。っていうのはまずあの徹底したそういう時間が取れないっていうのが1つ、これがまず大きな問題点。それと、やっぱ休みがちちょっとやっぱり多いんですよ。〇〇商行ってた頃っていうのは当然、週6日7日あるうち、6日びしっともう鍛える練習なんて居残り何時までやってもいいっていうような感じだったですけど、中学校って今違うんですよ。もう、時間もやっぱ何時っていうのは限られてて、出なきゃいけない学校から。だからもう、もうほんと限られた時間しかできないので、正直やっぱりあの一、まあ、同じこと何回も何回もやって、まあそれでいいんですけども、やっぱ途中空いてしまうとやっぱ、また戻っちゃってるん

ですよ。」

I18 「私もちょっと意義はよくわからないです今は、まだ、中学校のコーチやって半年ですねこれで、専門にやってこの学校単位という部分ですか、連盟にいたときはやっぱりある程度できる子、まあ、そこに来た子を徹底的に教えて時間を作って、学校外で教えるっていうことだからやっぱり伸び率は全然いいですよ。だけど、やっぱり学校っていうのは部活ですから、1人のことだけ見るってはいかないですね。やっぱり、平均的にたぶん10人15人いれば15人はある程度見なきゃいけないっていうものなんですよ。だからなかなか難しいなっていうのはありますね。まあ意義となると、そうだなあ・・・」

一方で、勉強と部活のバランスについては考慮する必要があると考えており、文武両道 (I19) についても次のように述べていた。

I19 「だからやっぱりそっちが全然だめでやっぱり部活ばかりっていう訳にはこれもういかないですからね。全然宿題もやらなくてこっち(部活動)ばかりっていう訳にはいかせませんので、そっち(勉強)もある程度やってこっち(部活動)もきちっとやるっていうことしないと居残り練習とかまあそっちに鍛え上げるっていうのもちょっとできないのかなと」

3-6. 関係性

関係性については、生徒との関係性、教員との関係性、学校との関係性、保護者との関係性、保護者との連絡、保護者への要望、学校への要望のカテゴリーが挙げられた。

生徒との関係性として生徒との関係づくりで気をつけていることと、生徒との関係でやりにくいことが明らかとなった。生徒との関係づくりで気をつけていることは、普段と練習のメリハリをつけて生徒と接している、練習で叱ったとしても練習後は笑って馬鹿話して卓球仲間として接している、普段は友だちとして接する、練習が終わったら家族のように団らん場として話をしたりする (I20) といった

普段と練習のメリハリが挙げられた。

I20 「練習中はやっぱり鍛え上げるところ精神面とかそんな甘いことばかり言ってもらえない、みんな集中して勝ちたいと思ってレクレーションじゃないからって、まあ、それが終わったらそれはもうやっぱり、一家族みたいな感じで団らんのかとして話できるようにした方がいいのかなって思います。」

一方で、生徒との関係でやりにくいこととして、生徒が何を考えているのどこまで指導を理解しているのかわからない (I21)、感情を全面に出す生徒が少ないといった意思表示や感情の少なさが挙げられた。

I21 「本当にどこまでこの子真剣に考えているのかなって、とかって言うのは、正直その心の蓋割ってみたいと思うんですけど、わかんないですよやっぱりそれだけは。だからこそやっぱり、まあ、私ができるのは丹念に丹念に同じこと何回もききちとやらせて、自信をつけさせる、まあ、これがまあ、彼らへの私ができる1番の教育なのかなって。正直わかんないですよ。何考えているかって。特に今の中学生はやっぱり、素直な子多いんですけど、だから『はい』、『はい』と言うんですけど、本当にどこまでわかっているんだろうなっていうのはやっぱり多いですね。」

教員との関係性として、教員と指導の連携、顧問との連絡、教員との関係でやりにくいことが明らかとなった。教員と指導の連携として、練習メニューについては任されていてある程度主導で指導しているといった練習メニュー、顧問が主導で学校の練習場所を決めているといった練習場所が挙げられた。顧問との連絡については、顧問と練習時間の練習場所は決めているといった練習時間、顧問と部活動の運営方針や指導方針の連絡はあまり取っていないといった運営指導方針が挙げられた。教員との関係でやりにくいこととしては、顧問と卓球の競技レベルが違って指導方針で理解してもらえないところがあるといった顧問との競技レベルの創意による考え方の違いが挙げられた。

学校との関係性として生徒の退校時間が決まっていって練習時間に制約があるといった生徒の退校時間による練習時間の制約の練習環境が挙げられた。保護者との関係性として、息子が卓球部に入部しているため自身も保護者であるといった部員の保護者が挙げられた。保護者との連絡として、練習の時や練習試合の送迎でコミュニケーションといった練習や練習試合の送迎が挙げられた。

保護者への要望として、保護者の協力と保護者の積極性が明らかとなった。保護者の協力として、生徒を強くするためにはもう少し保護者と一体になる (I22)、生徒の競技レベルを上げる為保護者の協力といった生徒の強化、学習勝度の制限により保護者の協力といった学校での活動時間が挙げられた。

I22 「もうちょっと一体にならないと、子どもを本当に強くするとまだ足りないかなと思います。」

保護者の積極性として、生徒追加で練習を要望するような保護者の積極性 (I23)、中学校の3年間は時間がないため追加の練習を要望するような保護者の積極性といった追加練習の要請が挙げられた。

I23 「本当に強くしようと思うのであれば、別に私の方から、私からこうやれって言っちゃって強制なっちゃうんで、本当にそう思っているのであれば、別に私を何か借り出すようなことくらいしてもいいと思います保護者も。『ちょっとこの日ここで(練習)やるんで(練習)つけてもらえませんか』とかって感じでやっぱり言って来てもいいと思います。」

学校への要望として、用具や設備、時間の制約が明らかとなった。用具や設備としては、連数環境の設備といった練習環境の整備、時間の制約としては、外部協力者養成の為時間の制約が問題 (I24) といった学校での活動時間が挙げられた。

I24 「やっぱそれはね、ただ学校っていうレベルでいくと限界も予算もあるので、まあ、あんまり言えないけど、まあ、せめて予算が変わらないのであればいいですそれは。ただ時間、これは少し伸ばしてもらって、ある程度『こ

の日とこの日、2日くらいは例えば今日はちょっと強化練習を2日間やります』例えばです、8時とか、9時10時なるのはちょっとこれは問題ですから、せめて8時半まで、週2回とかってなれば、私の他の人ももっと若手のゲーム練習をこの子たちとやっても全然いい感じでやってくれるっていう人を呼べるわけですよ。協力者を周りから出せるんですけど、やっぱり時間に限りがあると私やっぱりやるのもちよっとなっちゃうし、やっぱり物理的にそこだけを変えなきゃいけないです。」

3-7. 論議

研究の結果以下のことが論議できる。外部指導員の依頼は競技団体や協会、地方自治体の紹介というよりも地域に根差した知人や血縁関係のついでで行われることが多い。これは、指導者に対して競技成績や経験だけでなく、人間性を考慮した実際に指導に通いやすい人材の選定を行う傾向があることからこのような現象が起こっていると考えられる。またこの外部指導者Aさんが社会人になっても競技を続けることができたり、コーチを始めるきっかけとなったのも、人の理解や紹介を通じて起こったことであることが明らかとなった。

また外部指導者Aさんは、基本技術、人間形成、人間関係を大切に、自主的に考えることを含めた練習、等総合的な観点で生徒を育てる視点をもった指導の信念、指導の特性を持ち、中学生という発達段階も自分なりに考慮して指導を行っている。このことから、外部指導員は、フルタイムの顧問や指導者と同じく、自分なりの信念を持ちながらスポーツの指導を行っていることが明らかとなった。顧問との協力体制も練習メニューを決める等ある程度の決定権を持ちながらも、また多少の食い違いは感じながらも、上手く連絡をとりながら行っている。また保護者との関係性についてもいくつかの要望は持ちながらも、コミュニケーションを取りながら上手く保っている。

しかし、中学校運動部活動の意義については分からないと回答し、特に学校側の決めたスケジュールで部活動の活動時間が制約されることについて、不満を抱いている。学校としては、期末試験や様々な行事との兼ね合いから生徒の帰宅時間を定めてお

り、その範囲内で部活動の活動時間を決めているが、外部指導者Aさんは教員ではないのでそういった事情を理解できずに、あくまで競技である程度の成績をおさめることや他の外部指導者の協力といった部活動の運営を中心に考え、正規の部活動の時間を延長した練習時間の設定を希望している。また、保護者への要望もよりよい成績をおさめるために練習時間を増やすように学校に対して要請するように、ある意味過度な期待を抱いている。本研究対象の外部指導者Aさんは全国大会出場の実績を持つスキルの高い指導者であるが、学校の管理・運営上の問題や制限について十分理解しているとは言い難い。

文部科学省は外部指導員の設置に伴い、研修によって学校教育課程の一部である運動部活動について理解をはかることを方針として提出している。今回の研究の結果から、この研修の内容として、部活動の競技成績を伸ばしたり、より時間をかけて基本技術の習得を図ることだけを中心に部活動の練習時間を設定できるのではなく、あくまで学校の管理運営上の問題や行事との兼ね合いから部活動の時間があらかじめ定められること等、学校課程特有の事情を周知する内容を盛り込む必要が提言できよう。また、この外部指導者自身の指導者としての信念は競技志向だけでなく他者との関わりや尊重や人格を尊重した自主的な練習が含まれており、中学校部活動のあるべき方向性と相反するものではない。学校教育における部活動の意義もその研修内容として盛り込むことで、この指導者の中で共通項が整理され、その後自分なりの中学校における部活動の意義を形成できる可能性があることも予測できる。

4. 結語

本研究は中学校運動部活動の外部指導者にインタビュー調査を行い、その信念・指導内容・関係性を明らかにした。研究の結果以下のことが明らかとなった。

- (1) 外部指導者を行う契機は血縁者や知人の紹介であり、縁故や地域性の特性を持つ。
- (2) 指導信念として、強くなるだけでなく、スポーツを通じて感動を体験させる、スポーツを通じた人間関係や出会いの素晴らしさを知る、謙虚に練習をお願いする姿勢を持つ等、人格形成や人間関係の構築も含めた幅広い考えを持っている。

- (3) 指導内容や指導方針として、基本的な技術の習得や自分で考えることを含めた練習、動きながら教えること等の考えを持っている。
- (4) 中学校運動部活動の意義については理解できておらず、制限のある部活動の位置づけに疑問を持っている。
- (5) 関係性については、顧問とはある程度主導権を持ちながらも上手く分担し、保護者とはコミュニケーションを取るように気を配っている。しかし、学校に対しては部活動の活動時間の制約について大きな不満を持ち、部活動の活動時間を延長できるように要望を持っている。また保護者もこの問題について協力し活動時間延長の要望を学校に伝える役目を担うよう過度な期待を持っている。
- (6) 本外部指導者は高い競技力も持ち、青少年のスポーツを通じた全人的形成を目指した指導信念を持っているが、活動時間の制約等の学校の運営・管理上の事情については理解していないという限界を持つ。

今後の課題として、本研究は1回のインタビューにより結果を導き出したが、インタビュー調査はある程度の期間に何回かインタビューを行うことが望ましいとされる。インタビューの内容をより深いものとするためにも、より時間をかけて回数を増やしてインタビューを実施することが挙げられる。今後研究の発展を期待したい。

追記：本研究は秋田大学手形地区ヒトを対象とした研究倫理審査委員会の倫理審査を受け、2016年11月17日に認定を受けています（第28-6号）。

参考引用文献

- 青柳健隆 (2015) 運動部活動における外部指導者活用推進策の質的検討。早稲田大学審査学位論文博士 (スポーツ科学), p3.
- 神谷 拓 (2014) 運動部活動の制度史と今後の展望。体育科教育学研究, 30(1) : 75-80.
- 木村吉次 (2015) 部活動。中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫, 21世紀スポーツ大辞典, 大修館書店: 東京. pp.1088-1090.
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領. p19.
- 文部科学省 (2014) OECD国際教員指導環境調査 (TALIS2013) のポイント.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2014/06/30/1349189_2.pdf#search='OECD%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E6%95%99%E5%93%A1%E6%8C%87%E5%B0%8E%E7%92%B0%E5%A2%83%E8%AA%BF%E6%9F%BB%28TALIS2013%29%E3%81%AE%E3%83%9D%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%88'.
 (参照日平成28年11月7日)
- 中澤篤史 (2014) 運動部活動の戦後と現在－なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか－。青弓社, pp93-110.
- 中澤篤史・西島 央・矢野博之・熊谷信司 (2008) 中学校部活動の指導・運営の現状と次期指導要領に向けた課題に関する教育社会学的研究－8都県の公立中学校とその教員への質問紙調査をもとに－。東京大学大学院教育学研究科紀要, 48.
- 日本体育協会 (2014) 学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書, p.6.
- 鈴木和弘 (2015) 運動部活動の指導。杉山重利・佐藤 豊・園山和夫, 新・めざそう！保健体育教師。朝日出版社: 東京, pp.107-129.
- 高木展郎 (2016) Q&Aで理解する「チーム学校」。体育科教育64(6) : 16-19.
- 友添秀則・西島 央・内田 良・嶋崎雅規 (2016) 部活動指導員で部活は変わるか？。体育科教育64(6) : 20-30.
- 友添秀則編著 (2016) 運動部活動の理論と実践, 大修館書店: 東京, 293p.
- 中央教育審議会 (2015) チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申)。文部科学省, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/02/05/1365657_00.pdf. (参照日平成28年11月7日)
- 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 (2013) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～。文部科学省, p1.
- 吉田 毅 (2012) 競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する社会学的研究: 車椅子バスケットボール競技者へのキャリア移動を遂げた元Jリーガーのライフヒストリー。体育学研究, 57 : 577-594.

吉田 毅 (2012) 中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究：骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから. 体育学研究, 59 : 855-867.

Summary

School sports club activity support student's whole growth and valued at school. School teacher had a role of coach but it add much extra works, so the administration of education in Japan decided to facilitate third party sports coach in school for decreasing teacher's too busy situation. The purpose of this study is to understand the current situation of the sports coaching in Japanese academies through their belief, teaching content how thinking the relationship to school and parents through a case study using interview. As results of this study suggested that third party sports coach did not focused only to win, facilitated students moving experience, good human relationship

and meeting nice person through sports, whole human growth. As coaching direction he focus gaining basic skill and technique, facilitation student's own thinking after making mistake, instruction with moving. As good relationship with head coach teacher and parents, he having right decide practice schedule and share works managing sports club and trying making chance communication with student's parents. But he made an excessive objection to time limitation of sports club activities, and not understanding school management issue they have to make a balance other school events.

Key Words : school sports club, third party school sports club coach, belief, interview, junior high school

(Received January 10, 2017)